

# 低学年児童における運筆機能と利き手の関連性

大庭 重治  
(上越教育大学)

## 1. 問題と目的

児童が運筆機能を獲得していく際には、保護者や教師など、大人の行動がその見本となる場合が多い。ところが、見本となる大人には右利きが多いため、左利きの児童では、その参考となる見本が得られにくい状況にある。このようなことから、書字学習の初期にある左利きの児童は、様々な側面において不利な学習状況におかれていると考えられ、指導においては、その状況を正しく把握しておくことが必要である。そこで本研究では、一斉指導による指導が困難であり、かつ学習効率に大きな影響を与える筆圧に着目し、左利き児童における固有の筆圧値と意識的な筆圧調整の状態について検討した。

## 2. 方法

### 1) 被験者

左利きの2年生9名(月齢は90~96か月)。右利きの2年生12名(月齢は93~97か月)。利き手の判定は、ピンポン投げ、太鼓叩き、ハサミ、箸、ペンの各使用の5項目により行った。左利き児童では、ペンの使用はすべて左手であった。いずれの被験者も、発達的に問題となる所見はみられなかった。

### 2) 手続き

強弱に関する指示が与えられない状況において円を5回描く課題(基本描画課題)、言語指示が与えられない状況で円を描く課題と、指示に応じて「半分」あるいは「倍」の力で円を描く課題を組み合わせそれぞれ5回実施した(指示描画課題)。2Bの鉛筆を使用し、描画中の筆圧を筆圧測定器により測定・記録し、同時にデータレコーダにも記録した。サンプリング間隔は2msecである。本報告では、描画中の最大筆圧値を分析の対象とした。また、課題遂行中の様子をVTRに記録した。

## 3. 結果と考察

Fig1に、基本描画課題における最大筆圧の平均値を被験者ごとに示す。右利き被験者に比べて、筆圧が特に高い者が2名(被験者2, 6)みられた。この2名は5回の測定におけるばらつきも他の被験者に比べて大きい傾向がみられた。なお、2名における筆記用具の把握形態には全く問題はみられなかった。

Fig2に、言語指示(半分及び倍)に伴う最大筆圧値の変化率を示す。言語指示(半分)に伴い、9名中8名では筆圧の低下がみられた。そのうちの2名(被験者2, 8)では、過度に筆圧が低下した。被験者2は、基本描画課題において特に高い筆圧を示した者であった。また、被験者5では、言語指示(半分)に伴い、逆に筆圧が上昇した。右利き被験者では、このような筆圧の上昇が観察された者はいなかった。また、言語指示(倍)に伴い、いずれの被験者においても筆圧の上昇が観察された。そのうちの2名(被験者7, 8)では、過度に筆圧が上昇した。右利き被験者では、この2名のように、筆圧変化率が300%を越える者はいなかった。なお、この2名は基本描画課題では標準的な筆圧値を示していた。

以上のように、左利き児童の中にも、固有の筆圧が高く、またその変動が大きい者が存在したり、意識的な筆圧の調整が求められた際に、過度な調整がなされる者がみられた。本報告の被験者は、書字学習において特に困難を示していた児童ではないものの、固有の筆圧が高いことにより手指の疲れが生じ、学習効率の低下を招いている可能性がある。その原因を明らかにするためには筆圧の改善過程を検討する必要があるが、いずれにしても教室における一斉指導においては、左利きの児童にも配慮した書字指導方法の工夫が求められる。

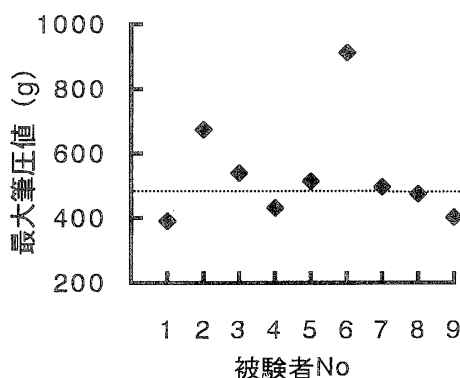


Fig.1 基本描画課題における最大筆圧値  
(破線は右利きの平均値)

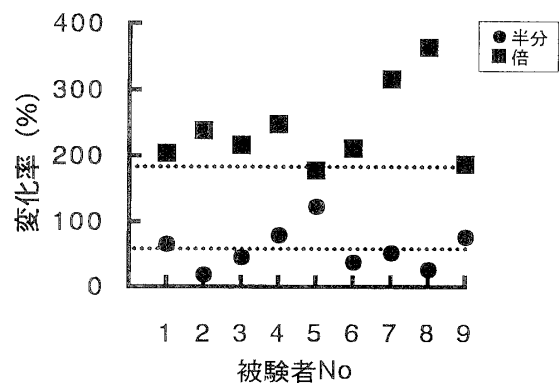


Fig.2 言語指示(半分及び倍)に伴う筆圧の変化率  
(破線は右利きの平均値)